

コメディリック第4回「この振る舞いを見る」

「理解の部屋く振る舞いの館・エピソード2」

登場人物

高木 ペイリー・チャイルド

土井泰 シロスコフ

〔L・明転(青)〕

※高木、登場

高木、恐る恐る歩く

高木 「おい。どこ？どこ行つた？吉田？白石？齋藤？齋藤？変態？変態？」

モニター『理解の部屋』

〔SEE・ナレ〕

ナレ 「ここは『理解の部屋』他者の思想を理解し、真の分かち合いを手に入れた者のみが部屋を出ることを許される」

高木 「なになに？理解の部屋？え？」

モニター消し

※土井泰先輩、登場

土井泰 「あー、疲れた」

高木 「え」

土井泰 「ちよ、肩揉んで、肩」

高木 「え？」

土井泰 「はい、ほら」

仕方なくゆっくり肩を揉む高木

土井泰 「何か超すべらない話無い？」

高木 「え」

土井泰 「ただすべらない話じゃないよ？超すべらない話」

高木 「いや、あの、どちら様ですか？」

土井泰 「誰って、新田真剣佑だよ」

高木 「いやいや」

土井泰 「へへ。あー大分、スッキリしたわ、いわ。(シャドウボクシング) シュッシュッ」

高木 「いや、やめて、マジで。なんなんですか？ここは？」

土井泰 「ここは『理解の部屋』だよ」

高木 「だから何ですかそれ」

土井泰 「俺を理解する。つまり俺の機嫌を取らないとこの部屋から出れないんだよ。(シャドウボクシング) シュッシュッシュッ」

高木 「いい、いい、いい。え、あなたの機嫌

を取らないと部屋から出れないんですか？」

土井泰 「そうだよ。だから超すべらない話しろ
つて」

高木 「えーこんな痛い先輩みたいな人から
…」

土井泰 「俺の名前は土井泰（ドイタイ）」
「名前そのまま」

高木 「ほら伺えー機嫌伺えー」
「あの…他にもオレ以外にいたと思うん
ですけど」

土井泰 「ツレがどうなってるかは知らないけ
ど、お前は俺の機嫌を取らないと部屋か
ら出れないんだって」

高木 「いやー」
「ほら、超すべらない話。ほら機嫌を取
れ。伺え俺の機嫌を」

土井泰 「いや、そのフリで無理でしょ、そんな
ん」

高木 「いいから」
「いやー、この前セブンで買い物したん
すよ。そしたら、レジの外国人がローソ
ンって名前だったんです」

土井泰 「いいから」
「いやー、この前セブンで買い物したん
すよ。そしたら、レジの外国人がローソ
ンって名前だったんです」

高木 「いいから」
「いやー、この前セブンで買い物したん
すよ。そしたら、レジの外国人がローソ
ンって名前だったんです」

間

土井泰、爆笑

土井泰 「なんで、なんで、セブンで働いてんだ
よ！ローソンで働けよ」

高木 「あれ？案外いけるかも shouldn't
「俺の超すべらない話も聞く？」

高木 「はい」
「街歩いてて、ほんで肩ぶつかって、お
いおいちよー待てや言うて、ほんでそい
つがバってこっち向いたら、まさかのナ
イフ持ってて、やばーおもてー俺もなん
か出さなおもて、バーっポケットまさぐ
ったら、なに出てきた思う？…ホチキス
…やばない？」

土井泰 「…はっはっはっは！超面白いっす！」
「やばいっしょ？マジでウケるっし
よ？」

高木 「しんど…」
「まあ、それで二度と開かないように口
閉じてやったけどね」

土井泰 「こわ！」
「でもほんと丸くなったよな。俺、丸
くなっただっしょ？」

高木 「こわ！」
「でもほんと丸くなったよな。俺、丸
くなっただっしょ？」

土井泰 「こわ！」
「でもほんと丸くなったよな。俺、丸
くなっただっしょ？」

高木 「こわ！」
「でもほんと丸くなったよな。俺、丸
くなっただっしょ？」

土井泰 「こわ！」
「でもほんと丸くなったよな。俺、丸
くなっただっしょ？」

高木 「こわ！」
「でもほんと丸くなったよな。俺、丸
くなっただっしょ？」

高木 「昔知らんし」
土井泰 「歳取ると痩せにくくなるってほんとなんだな」
高木 「体型の話ね」
土井泰 「お前さ、あれ知ってる？あれ」
高木 「なんですか？」
土井泰 「夢を見るのって眠りが浅いからなんだって」
高木 「いや、それくらいみんな知ってますよ」
土井泰 「え、みんな知ってるの？」
高木 「はい」
土井泰 「じゃあ、これは？寝る子って育つらしいよ」
高木 「それはそうでしょ」
土井泰 「知ってるの？」
高木 「みんな知ってますよ」
土井泰 「ふーん…なんだ知ってるのかー。お前一人っ子？」
高木 「え、なんでですか？」
土井泰 「いや、なんか。俺、一人っ子の奴、嫌いなんだよねー」
高木 「偏見すご…」

土井泰 「そうか知ってるのかー（ホッチキスを取り出し、カチャカチャ鳴らす）」
高木 「こっわ」
土井泰 「お前は？」
高木 「はい？」
土井泰 「お前も何か教えてよ」
高木 「いやいや、僕なんか馬鹿ですから」
土井泰 「いいから言えって。もし俺が知ってたら（笑顔でホッチキスカチャカチャ）」
高木 「えー…あの…男はセックスするしかないか関係なく女性と一緒に寝たら、脳の働きが落ちて、次の日、頭が悪くなるらしいです」
土井泰 「…マジで？」
高木 「はい」
土井泰 「すげー…え、じゃあモテない方がいいじゃん！な？」
高木 「そうっすね」
土井泰 「マジかーそれすげえなあ」
高木 「よかったー」
土井泰 「それ俺もらっついていい？」
高木 「どうぞどうぞ。もう一生使わないんで好きにしてください」
土井泰 「そっかー。お前俺のこと嫌い？」

高木 「いや、なんなんすか急に」

土井泰 「いや、なんとなく」

高木 「今会ったばっかじゃないですかー」

土井泰 「正直に言えって」

高木 「このパターンむず。正直に言って打ち解けるパターンか…好きですって嘘ついてよいしょして受け流すパターンか…」

土井泰 「何一人で言ってるの？」

高木 「いや、すいません」

土井泰 「俺の悪口？」

高木 「いや、違いますよ」

土井泰 「じゃあ、嫌いだ？俺のことが」

高木 「なんでそうなるんですか」

土井泰 「マジで、マジで」

高木 「…いや、全員が全員好きになるタイプじゃないと思うんですよ。でも、俺は好きです」

土井泰 「…マジで？」

高木 「はい。人選ぶとは思うんですけど…俺は好きです」

土井泰 「え、なんで、なんで」

高木 「何か変わってるじゃないですか？人と違うというか」

土井泰 「へー」

高木 「一緒にいて退屈しないし」

土井泰 「へー」

高木 「愛が深いんで羨ましいっすね」

土井泰 「あ、そうなんだー」

気絶する土井泰

【SE・ドア】

高木 「ドア、開いた…しんどかったー…（行こうとするが、立ち止まりホッチキスを奪って）口閉じとこ」

【し・暗転】

ー了ー